

第1話

はじまり

あの満天に広がる星空は、きっと女神様の魔法
だったんです――

リリアーナ・クレール

1.1 プロローグ

その人はアレの前に立ち塞がりました。

当時の私はアレが何なのか全然知らなかったけど、きっととても強大で邪悪なものだということは分かりました。

あの時、アレは――悪竜の群れは明らかに悪意を以って、森を焼き、家屋を踏み潰し、人を食らい、命を蹂躪していたのです。

悪竜は女の人も、子供も、お爺ちゃんお婆ちゃんも見境なく殺していきました。村の腕利きの人たちも、悪竜から皆を守って死にました。仲のいい友達も何人も居なくなって、私のお父さんもお母さんを庇って…。

その時です、その人は私たちの前に現れ、アレとの間に立ちふさがりました。

その人が張った結界によって、村は不思議な守りに包まれます。

あらゆる一切の邪悪、不条理、暴虐を断つ、清浄なる夢幻の守り。

それは悪竜であっても例外なく防ぎました。

悪竜は困惑します。

『この結界は何なのか、何がここまで強力な結界を作り上げたのか。』

そんな中、その人は臆することなく悪竜の群れへと突き進みます。

その人の杖の一振り、青白い弧を描き、その軌跡は一条の星となって次々と悪竜を撃ち落としていきます。

一匹、また一匹と打ち落とされていく中、悪竜は理解します。

『自分たちを打ち落としているのは、あの村を守っているのは、あの人間なのだ。』と。

悪竜の群れはその人を倒さんと向かっていきます。

ある悪竜は鋭い牙で食らいつきました。

ある悪竜は鉄より硬い爪を突き立てました。

ある悪竜は灼熱の業火で焼き払いました。

――数百の悪竜がその人へと攻めかかりました。

それでも——それでも、その人は怯みません。
道を阻む悪竜を次々と打ち砕き——
一歩、また一歩と群れの中心へと突き進んでいきました。

そして——その悪竜の群れの主と相對するのです。
——その時は来ました。
それは、星空そのものでした。

「其は虚無の海に輝く星。途絶えず、揺るがず、違えず、人を照らす希望の光」

その時の光景を忘れたことはありません。
真昼の空に広がるのは満天の星空。
今まで見たどんな景色より、それは美しく鮮烈で、そして何より——

「邪悪なるものを撃ち滅ぼし、人の世に安寧と救済を——！！」

私の心を掴んで離しませんでした。
だから私は——

1.2 巣立ち

「お財布は持った？」

「持ったよ！」

「お弁当は持った？」

「持った！」

「身分手帳は？」

「持ったってば！！」

「じゃあ——ティリア先生の推薦書は！？」

「そんなの絶対忘れるわけないよ！！」

その日は私が村を出る日でした。家の前には、旅立つ私を見送るために村のみんなが集まっています。
私はこの春、ローゼ＝フィアス魔術学園に入学します。あの格式高いローゼ＝フィアス魔術学園です（と言ってもこの時点ではどれぐらい歴史があってすごいところかとかは知らなかったんですが……）。
はい、つまり私は——

——これから魔術師を目指します。

家事もだめ、勉強もだめ、狩りも農業も商売もダメな私が初めて頑張れそうな事が出来たって言ったら、村のみんなはすごく喜んでくれました。
村はまだあの事件の傷が癒えていなくて、生活も苦しいはずなのに、学校への入学料は村のみんなで出すって言って、私の遠慮も聞き入れてもらえませんでした。
この日見送りに来てくれてた人たちはみんな、こんな身勝手な私の幸せを願ってくれる、私の大好きな人たちです。私はそんなみんなに報いたくて、立派な魔術師になって、村のみんなを助けてあげられるように頑張りたいと考えていました。——なんていうのは本当は詭弁なのですが。

そんな中、まだかまだかとみんなを待たせて、私とお母さんは何をしていたかという、最後の持ち物チェックをしていました。
ドジで間抜けな私は、日頃からすぐに忘れ物をするので、こうしてお母さんと一緒に持ち物を確認するのは、外出する時の習慣だったのです。
でも、それもこれまで。これからは自分で用意をしなければいけません。（といっても、結局寮ではエリーと一緒に確認することになるんだけど。）

「制服よし、髪型よし、笑顔よし！」
私とお母さんで、いつもの確認を一緒に言い終えたら、最後の準備はおしまい。
玄関で靴を履いて、いつもの靴ベラとお別れを済ませたら、ドアを開けてみんなの元へ。

「って、おわっと」

……このようにつまづいてしまうこともあります。

「いつも歩いてる玄関でよくも器用につまづけるわねえ」
「いったいよお……なんで今日に限ってつまづくのかなあ」

「別に今日だけの話じゃないでしょう。さっさ、皆いるわよ。挨拶しなさい」

ちなみにこのように私はいろんな所でつまずくいてはこけています。(今日に限ってと言うのもただの見栄です。ごめんなさい。)

「いたそうだなありリア。こんな調子じゃア学園でやってけねえだろ」

「茶化さないであげてよおじさん。リリアーナちゃん、大丈夫？怪我したところあったらすぐに見せてね？」

このふたりは鍛冶師のパレルさんと薬師で治療師のローレルちゃん。ローレルちゃんはよく怪我をする私をお薬や魔術で治してくれます。すごく立派な子で、私とそんなに歳も離れていないのに、既に治療師の仕事をしっかりとこなしています。道中で怪我をしても大丈夫なように、昨日たんまりとお薬を渡してくれました。

パレルさんもこんな感じではありますがいつも面倒を見てくれる良い人で、学園に入学すると聞くなりスタッフを作ってくれました。スタッフは素材の都合上すごくお金がかかるのに、タダで戴いてしまいました。

「大丈夫だよローレルちゃん、ちょっと擦っただけだしほとんど怪我になってないから」

「おいおい、おじさんにはスルーかよ。ちょっと悲しくなっちまうぜ」

「意地悪なことを言うおじさんは知りません」

「おじさんも心配しているだけだよ。そう気を悪くしないであげて？」

「まあ、ローレルちゃんがそこまで言うなら……。おじさんもスタッフありがとう、大事にします」

「いやあ、別にそういう風に言わせたかった訳じゃなくてだなア……。いや、気に入ってくれたなら鍛冶屋冥利に尽きるってもんよ。頑張れよりリア！」

そういうとおじさんは私の背中を叩きます。(これごまかしたよね？絶対照れ隠し入ってるよね？)

「これこれ、他にも話したいものは居るんじゃ、貴様らだけでリリアーナを独占するな。」

「あ、長老様、ごめんなさい……」

「わりいわりい、朝っぱらから心配になるような事しでかすんでついな」

この人は長老、村をまとめてくれている方です。(実はみんな長老としか呼ばないから未だに名前を知らないんだよね……。今度調べておきます……。) 私が入学したいって言ったら、最初は反対していましたが、最後には納得してみんなに声をかけて入学金を募ったりしてくれました。普段もすごく優しい人で、困ったことがあったら相談に乗ってくれたりしてくれます。

「全く、朝話し始めると出発が遅くなるから、言いたいことがあるなら昨日のうちに言っておけとあれほど言っておったのにな。ま、いい。リリアーナ、村を代表して儂が祝辞を言わせてもらおうぞ」

「じいさんは良いのかよ」

「儂以外に誰か適任が居るんか？」

「いやバルディウスの兄貴とか」

「あやつ今居らんやろ。今日も見送りたいと言いながらも仕事で王都じゃろうが。というかそもそもリリアの父親じゃろあやつ。絶対親バカを炸裂させて終わりじゃ」

「まとめ役つつたら浮かんだ名前を言っただけなんだけどな……」

「うるさいうるさい。お前と話しとったら埒が明かんわ。」

此処までの話で分かると思いますが、私の村の人はみんな仲良しです。誰かのピンチはみんなで乗り越えて、誰かの嬉しいことはみんなでお祝いします。私はこの時そんなみんなに沢山助けてもらって、このチャンスにありつけました。(ちなみにお父さんの話は後ですからもうちょっと待ってね)

「こほん、では改めて。リリアーナ・クレール、この度は村の――」

「ごめんね村長、今日は長いやつはいいなかあ～？なんて」

「コラ、お前はまたそうやって……はあ、ま確かに、今更お前にこういう事を言ってもお前からすれば門出が遅くなるだけなんじゃろ……」

「そういう事だよ！流石村長、話分かるね！」

「バカモン！皮肉なのが分らんのか……はあ。では短く纏めるぞ、村のモンはみんなお前が大きくなって帰ってくるのを応援しとる。やるべきことはしっかりとこなしながら、のびのび勉強するんじゃぞ」

「うん！みんなありがとう！！私行ってくる！！」

この日は行商人のダリアおじさんが街の方に帰る日なので、その馬車の荷台に乗せてもらいます。

「ほら、皆とお別を済ませたらさっさと乗りなお嬢ちゃん」

「うん！！それじゃあ行ってくるね、みんな」

「いってらっしゃい、リリア。馬車に乗るときに体勢崩してこけたりしなさんなよ」

「さすがにだいじょ――おとっと」

「ほら言わんこっちゃない」

こうして、私は村を出ます。この一歩が、私の人生をどうやって変えるのかは、まだこの時にはよくわからなけれど、新しい場所、新しい人とたくさんの発見が待ち構えていることは言うまでもなく、この時の私は期待に胸を膨らませるのでした。

1.3 出会い

カタカタと馬車に揺られて10分ほどが経ちました。森に囲まれた場所なので当然なのですが、村の家屋などは既にどこにも見当たりません。

私が生まれ育って、今から旅立つこの村はココン村。人口は200 300人程度の小さな村です。自然と調和するのどかな村で、名産品はなめし革、市場では上等品として取引されています。狩りをするため、強い狩人の方はたくさんいらっしゃるのですが、魔術師の方はほとんどいません。戦闘ができる魔術師に限れば一人も居ないのです。

先の惨劇では、村は大きな傷を負いました。あれから一年、みんなの尽力のお陰である程度村は整備されましたが、当時は家屋にも被害があり、外れに出れば焼け焦げたりなぎ倒された木々は未だにたくさん見当たります。

ここまでのことになったのは、村に戦える魔術師が居ない事も大きな要因でした。悪竜には刃が効きません。矢も鈍器も効きません。そうなのです、概念生物である悪竜にはたった一つの方法を除いて、攻撃が届かないのです。そして、その方法こそが魔術というわけです。

その様な話を知らないうちの狩人たちは、勇敢に、果敢に悪竜達に挑みましたが、結果としては返り討ち、いえ、おなじ土俵にすら立てないままに蹂躪されてしまいました。

では、わたしたちの村がなぜ辛うじて生き残れたかといえば、一重に流浪の魔術師様が村をお救いになられたお陰です。

そんな魔術ーティリア先生と出会ったのは、ちょうどいま馬車が走っている林道でした。あまりにも衝撃的過ぎて、一言一句先生の言動を覚えています。

その時の私はローレルちゃんと一緒に薬草を集めるついでに散歩をしていました。

「今日もありがとうリリアちゃん。お陰で今日もカゴいっぱい薬草が取れたよ！」

「でも、薬草じゃない草もいっぱい取っちゃった気もするけどなあ……絶対邪魔しちゃったよね……」

当時の私には野草の知識なんて無かったので、薬草の見分けなんかつくはずありません。私はなんとなくや勘で見たことがある草を選ぶのが精一杯でした。

「そんなことないよ、リリアちゃんのお陰で、私は見分けるだけで済んだし、何より一緒に出来て楽しかったもん」

「ローレルちゃんは良く出来た優しい子だよ……私なんて出来ること全然ないし、14にもなったっていうのに、未だにふらふら遊んでるだけだもん」

「そんなに焦らなくても大丈夫だよ。きっと、リリアちゃんにも出来ること絶対見つかるって。それよりも、今日のお散歩はどこまでいくの？あんまり遠くに行くとお母さんに怒られちゃうよ？」

「そうだなあ……じゃあ桃の木のところまで行こう。じゃあ、そうと決まれば競争！」

「待って、だめだよリリアちゃん！急に走ると転けー」

「うわっと」

「……大丈夫？リリアちゃん」

盛大に転けました。今回は両手をつけたので、顔は無事でした。(因みに何も無いところじゃなくて、ちゃんと小石につまずいて転けただけだから、私の名誉は保たれるはずだよね？)

そして、ふと顔を横に向けたときでした。

「ローレルちゃん！人が倒れてるよ！！」

「えっ！？まって、すぐにそっちに行くね！！」

青いドレスを着た、お人形のように綺麗な女の人が倒れていました。私はびっくりして起き上がり、ローレルちゃんとともに女の人の所まで向かいました。

「ローレルちゃん、脈とかある！？ちゃんと生きてる！？」

「大丈夫、気絶してるだけみたい。見た限り傷とかもないよ」

「それじゃあ病気で倒れちゃったとか？」

「それか疲労とかかも。流浪の冒険者の方とかなら道中で疲れて倒れちゃう事とかあるって聞いたことあるよ！！」

「見るからに冒険者って格好じゃないけど……」

「そしたら尚の事だよ。馬車とかで来たならこんな所で倒れているわけ無いし……」

その時です。

ーグウウウウ

「ん？」

「え、今のリリアちゃん？」

「違うよ！！あ、わかった！実はローレルちゃんなんですよ！誤魔化そうとしてもだめだよ」

「わ、私じゃー」

ーグウウウウウウウ

「……」

「……」

二人とも薄々分かっていました。この音は二人のお腹から発せられたものではありません。

でも、だからこそわかりませんでした。この音は一体どこから鳴っているのか。

周りには他に人はおろか、動物もいません。私達でも無いのであれば、一体どこから？

『全てのあり得ないことを除外して最後に残ったものが如何に奇妙なことであってもそれが真実となる』のなら、私達は次のことを認めざるを得ません。

「もしかして、この人から？」

「ええ……？」

「で、でもお腹が鳴ってるってことは元気な証拠だよ！もう一度意識を確認してみるね」

そう言って、ローレルちゃんが意識を確認するために顔に近づいたその時でした。女の人の目がカッと見開き、次の瞬間――

――かごの中に頭を突っ込みました。

「「は？」」

頭が突っ込まれたかごからはムシャムシャという音が聞こえます。そして暫くの間、その音だけがこの場を支配していました。

あれから10分ほどが経ちました。

「まずはお礼からですね！お腹が空いて動けなかったところを助けて頂いて、ありがとうございます！！」

かごの中の薬草をやぎのように全て食べつくすと、彼女は起き上がり私達に向き直って、そう言いました。彼女の立ち姿は正しくお人形の様な箱入り娘と呼べるもので、先程の許し難き蛮行と結びつける事はその上品な立ち居振る舞いからは非常に難しいところがありました。ですが、それはこの目で見たものを否定する根拠には足り得ません。

「……いえ……お力になれたのなら良かったです……」

「あの……それ……ローレルちゃんがお薬作のために集めた薬草なんですけど……」

「あっ……」

彼女の顔が青ざめて行きます。このとき自分が失態を犯したことをやっと理解したのでしょうか。そのうち、平謝りの姿勢に切り替わりました。

「あっ……あの……その……えっと……ごめ、ごめんな……さiiiiiiiiiiiiiiii」

「あ、えっと大丈夫ですよ。また集めればいいだけの話なので……」

「ごめんなさいごめんなさい。弁償させてください。食べた分全部私が用意します！！あ、それだけは足りなければなんでもさせてもらいます！！だからあ……だからあ……」

遂に『ぐすん、ひっく』と泣き始めてしまいました。

「えっと、と、とりあえず落ち着こうよ！ほんとに薬草は集めればいいだけだから！」

「そうですよ。それに、おなかが空いていらしたのであればお役に立ててよかったです……って、まって、あの量を全部食べてしまったということは……」

「うっ……うっぶ……おええええ」

副作用です。薬効成分があるものを大量に摂取するようになります。結局彼女は調子を崩してしまったので、ローレルちゃんが様子を見てくれている間に私が村まで大人を呼びに行き、空き部屋がある私の家で休ませることになりました。はい、これが私の人生にとっても大きな影響を与えた恩師との出会いでした。

彼女が目を覚めたのはあれから6時間ほど経った夕ご飯前のことです。ローレルちゃんが彼女に事の経緯を伝えると、家に受け入れてくれたお礼をしたいということで、